

〔論評〕 山口源治郎 「佐野友三郎論」 『図書館界』1984年に連載
石井 敦 (東洋大学)

(前号からのつづき)

つぎに2つの図書館標準図書目録を取り上げ、そこでの選定された図書の内容分析を通して、佐野の選択が教化的性格をもっていた、と論証している。しかし、これも奇妙なことで、これらの目録は(1)、佐野個人の選択ではなく、他の町村私立図書館員ら5名との合作であること、(2)当時の出版事情を何ら考慮していないこと、(3)図書内容を吟味せず、書名だけで今日的な観点から批判しているなど、佐野の図書選択論の批判にはならないと思う。

第1の点にかかわっていえば、1911年の『目録』の審査員は三井誠之進(私立西岐波文庫主管)、香川政一(村立華南図書館長)ら5名で、佐野はその一員にすぎない。しかも同目録は山口図書館協会席上「加除訂正ヲ要スル点アルトキハ・・・報告アランコトヲ」(館報告 第16)と、多くの県内図書館員にも文書参加を呼び掛けている。したがってこの『目録』は多数の人々の合作とみるべきである。たとえ佐野が主導的であったとしても、どこまでが佐野の選定か、判別できない以上、部分的に図書を抽出して、それを佐野の選定した図書ととらえ論ずるのはおかしいと思う。

第2の点では、同じ年に刊行された文部省刊の『図書館書籍標準目録』(1911年6月)と対比してほしかった。この目録は、文部省発行だが、編纂委員7名は佐野を含めて和田万吉、湯浅吉郎、渡辺又次郎、田中稲城ら全員が図書館界の良識ある人々である。この2つの『目録』を比較すると、<一般図書館>も視野に入れた文部省の目録に、山口の『目録』の図書が70パーセント近く吸収されている。当時の出版事情を考慮すると、内容においても、構成においても殊更に論ずべきことなのか、とくに教化性云々を指摘できるのか、と理解に苦しむ。まして構成比は法制・経済、美術部門などが「きわめて低率」などといってもさして意味はないような気がする。

第3の点では「地方改良運動のイデオログ井上友一」が期待するような『国

民讀本』類とか「日本武士道赤穂武士」「大岡政談」「真田幸村」など前近代的
美談をテーマとした云々と、図書内容の批判だが、大隈重信や竹越与三郎『人民
讀本』などもあるし、「大岡政談」や「真田幸村」などを簡単に「前近代的云々
」と切り捨ててよいのだろうか？そういう眼で批判されたら、今日の公共図書館
の選書はどういうことになるのだろうか？

いづれにしても、数人の合作である（地方の図書館の現実が多分に反映された
）『目録』にたいして、それを佐野の図書選択の実際と位置づけ批判することは
マト外れではないだろうか？

山口氏が佐野の選択論を批判する論拠は、彼の全論説を通じてたった1か所、
次の数行だけである。（「図書館と悪文学」は氏も“矯激な支配階級の声は響か
ない”（小川剛氏）点を認めている）。

「文芸又は思想に関する図書にして動もすれば多数青年者を累はず
べき慮ありと むるものごときは、假令、傑出せるもの、需要
多きものといえども必ずしも備付くるを要せず」

しかもこれも、前後を合わせて読むならば、最終的には「館長自ら取捨決定す
べきなり」と館長の判断に任せているのである。

山口氏は、それこそすみからすみまで一生懸命、佐野の論考の中から“教化的
性格”の記述がないかと探されたのであろうが、他の“図書の選択”論において
もこのような記述を発見することができず、そこで仕方無く、当時の社会状況や
周辺の資料、志賀の回想、さらには『目録』をひっぱりだしてこの章をまとめあ
げることになったのであろう。

しかし、ぼくは、そういう作業よりも、当時地方改良運動の指導者をはじめ文
部省当局者が躍起になって「矯激ノ思想ヲ鼓吹スルガ如キ」書籍の排除（小松原
文相の山口県図書館協会発会式の式辞）を叫ぶ中で、また佐野の立場からであ
ったら毎号のように『館報告』で図書館論を発表していたのだから、いくらでも権
力に迎合して図書選択論を述べる機会があったにもかかわらず、彼の全論稿を通
じて僅か1か所にしか山口氏の期待する文章がでてこなかった意味をこそ考える
べきではなかったろうか。“悪書追放”の大合唱の中で、あえて同調しなかった
奇跡的(?)な彼の態度こそ評価すべきではなからうか。

氏が引用されている「図書館普及改善ニ関スル訓令」（1917年）にしても、ま
た「図書館ヲ青年団ニ親シマシムヘキ方法如何」に対する県協会の答申にしても
、氏の期待する文言は残念ながら出てこない。かえって図書の選択は「青年ノ個

性ニ適切ナル図書ヲ選択」と指示しているのである。

山口氏は第2章の結びで「佐野の「通俗図書館」論は、明治末～大正中期の國家的諸課題の達成を山口県における通俗図書館活動の領野において現実化しようとするものであり、そのための理論的・実践的な方法を展開したものであったといえよう」と宣言されるが、逆に、氏が引用された佐野の論文の何十倍かの全論稿を率直に通覧すると、やはり佐野は「本来の公共図書館」を追求したのだ、とぼくは今も考えるのである。

たしかに彼にも時代の制約からくる多くの弱点をもっていた。その点についてぼくが言及してこなかったことは批判されても仕方がない。しかし、今日でも「日本的」な官僚機構はかなり強固に残存し、民主的な図書館活動の遂行を阻んでいる状況を考えると、明治末期の、全く図書館も理解しない天皇の官僚体制の中で、「本来の公共図書館」の実現はいかに困難であったか、それを果敢にきりひらき、事実、大きく前進させたことは、その過程においてどんなに苦しい闘いがあったか、現場で苦しんだものなら十分理解されると思うのである。

(受理 昭和60年1月20日)

第11回 運営委員会報告

*60年4月6日(土)午後5時より、東京、水道橋、談話室「滝沢」にて開催。

出席は石井敦、寺田光孝、是枝英子、小川徹、油井澄子、鮎沢修、中林隆明、工藤一郎、河井弘志。

*夏期セミナーを中心に検討した。セミナーの大枠については、以下のように決定した。

第3回 図書館史を考えるセミナー

テーマ 図書館における近代とは

日時 9月8日(日)、9月9日(月)

場所 東京(大東文化大学の会館を予定)

(詳細なプログラムについては、7月上旬発行の次回ニュース・レターで案内する)

セミナー実行委員会の構成は以下である。

委員長 工藤一郎

委員 小川 徹、 中林隆明、 塩田一徳、

中林摩利子、 久保明生、 田沼明子、

*機関誌『図書館史研究』（第二号）の編集は進行中であり、この8月中・下旬に日外アソシエーツから発行する。掲載論文名、その他については、次回のニュース・レターで案内する。なお、編集委員会は第三号についての構想を検討しはじめている。

*IFLA 第7部会（図書館学の研究と教育）では、図書館史関係のレポーターを募集している。

発表を希望する人は、5月24日までに下記に申しこむこと。申込についてはテーマとレポーター名だけで結構です。

申込先

図書館情報大学内 藤野幸雄

*次回 運営委員会 6月22日（土）午後5時から
東京にて

事務局より

*昭和60年度 新入会員

*昭和60年度の会費納入は、現在65% となっています。年間会費は1,000 円です
早期納入に御協力ください。

*図書館史にかんする、短い原稿（400 字×10枚程度）を募集しています。
原稿は、受理した次のニュース・レターに掲載することを原則としています。
ふるって、応募してください。

（文責 川崎 良孝）